

過活動膀胱は、高齢者の健康関連QOL低下と関連する

65歳以上の地域住民10,271人を解析し、症状の重さとQOL低下の関係を明らかにしました。

過活動膀胱（OAB）は、突然我慢しにくい尿意（尿意切迫感）を中心とする症候群です。本研究では、山形県の地域住民を対象に、OABの有無・重症度・症状別に、健康関連QOL（EQ-5D-5L）との関連を検討しました。

解析対象

10,271人

山形コホート研究に参加した
65歳以上の地域住民

過活動膀胱の割合

27.9%

2,864人がOABに該当。
年齢とともに割合は上昇

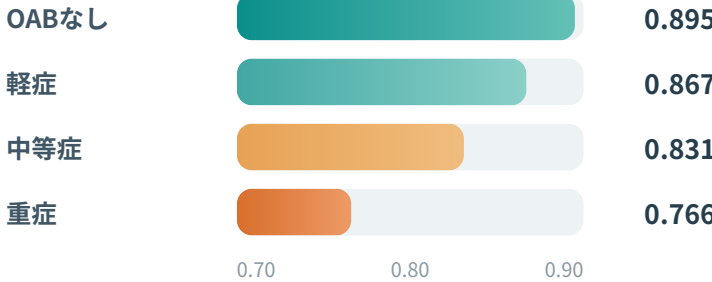
調整後のQOL差

-0.057

EQ-5D-5L効用値。臨床的に
意味のある差（MID 0.033）を上回る

症状が重いほど、QOLは段階的に低下

EQ-5D-5L効用値の中央値（高いほど健康状態が良好）



重症OABでは、OABなしと比べた調整後の効用値低下は **-0.150** でした。

特に影響が大きい症状

QOL低下との関連が最も強い症状

尿意切迫感

切迫性尿失禁

日常生活への影響

問題のオッズ 2.46倍

OABのある人は、EQ-5D-5Lの「自己管理」に問題を抱えるオッズが最も高く、次いで「普段の活動」への影響が大きくみられました。

研究から得られたメッセージ

OABは単なる「年齢のせい」ではなく、**生活の自立や日常活動にかかわる重要な健康課題**です。地域やプライマリケアで早期に見つけ、症状と重症度に応じた対応につなげることが重要です。

65-69歳

70-79歳よりも大きな
QOL低下との関連を認め
ました

掲載論文

Tsuchiya N, et al. The status of health-related quality of life among older adults with overactive bladder: a cross-sectional analysis of the Yamagata Cohort Study in Japan.

Quality of Life Research. 2026;35:192. DOI: 10.1007/s11136-026-04248-2

※本研究は横断研究であり、過活動膀胱とQOL低下の因果関係を直接示すものではありません。